

CONTENTS

自作自演220 高田雅司・脇田幸三 2

「東海とっておきガイド」100回掲載を振り返って 3

第4回 木造建築の語られ方

日曜大工デモクラシー 竹内孝治 4

フレッシュマンセミナー参加者レポート 上原徹也・及川博文・内田実成 6

JIA 静岡発 第2回建築ウォッチング

「掛川市森林組合新事業所」を探访する 望月美幸 7

JIA 愛知発 CPD 研修会「SHARES (シェアーズ)ラグーナ蒲郡」見学会

「住宅市場の現在」を体感! 黒野一郎 8

JIA 愛知発 JIA・名古屋市立大学授業を振り返って 久保田英之・鈴木賢一 9

JIA 三重発 会員研修5 建材研修会 不易流行 松本正博 10

JIA 愛知発 『建築家+』発刊

一般の方々への広報・接点として 高嶋繁男 11

表紙シリーズを振り返って 降旗範行 11

名古屋城木造復元について 原真佐実 12

東海支部役員会報告 吉元 学 13

保存情報 第197回 前野町火の見櫓 中澤賢一 14

有松 服部良也家住宅 三井富雄 14

Bulletin Board 15

地域会だより 15

編集後記 伊藤彰彦・宇野 享 16

設計図は語る ● 1

金城学院高等学校「榮光館」

城戸武男建築事務所 (1933 [昭和8] 年設立)

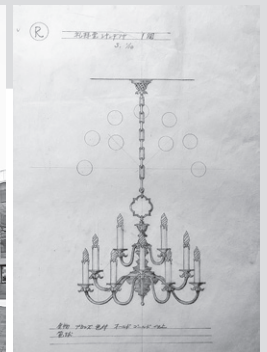
榮光館は先の大戦で被弾し階段室と礼拝堂が大破しましたが、学校関係者のご尽力により戦後修復されました。物資の乏しい時代ゆえ礼拝堂は当初のものとは様変わりをしています。表紙の写真は 1935 (昭和 10) 年に制作された榮光館の原図です。運よく戦災を逃れた戦前の図面のひとつで和紙のトレーシングペーパーに描かれています。

鉛筆で緻密に書き込まれた図面は CAD 図面にはない魅力があり引きつけられますが、写真ではわかりづらいのが残念です。

照明器具の姿図は最近になって見つかりました。榮光館は金城学院にとってシンボリックな建物であり、1998 (平成 10) 年には登録有形文化財に指定されています。この図面を見るたびに焼失前の礼拝堂の繊細なディテールを実物で見られたらと思いを馳せてしまいます。



榮光館外観



照明器具の姿図

所在地…名古屋市東区
 竣工…1936 (昭和 11) 年
 構造・規模…鉄筋コンクリート造3階建て
 基本設計…佐藤 艦
 実施設計…城戸武男
 施工…広瀬商会

城戸康近 (JIA 愛知)
 城戸武男建築事務所





高田 雅司 (JIA 静岡)

針谷建築事務所 (静岡市駿河区小黒3-6-9 TEL 054-281-1155 FAX 054-282-282)

建築設計者として半世紀、今こそ真価を発揮する時

昨年末 65 歳になりました。建築の設計者を目指し、学び始めてから半世紀を迎えようとしています。建築設計監理の実務に携わり 43 年、この間さまざまな立場で建築設計監理業務にかかわってまいりました。大学を卒業後現在の事務所に入所し、まずは公共施設の常駐での現場監理業務がスタートでした。5 年間の監理業務の後、プロジェクトのスタッフとしての実施設計業務、設計リーダーとして基本設計から実施設計まで、そしてプロジェクトリーダーとして企画から完成まで。近年は営業から組織やプロジェクトの管理、そして経営やさらには外部での業界団体での活動にと変化してきました。65 歳を過ぎ、組織での立場役割も大きく変わろうとしています。

年数を重ねるごとに俯瞰した立場で建築にかかわることが多くなっていましたが、この間どのような立場にあっても一貫して設計の実務(基本・実施設計業務)を必ず一物件は自らが実施することを意識的に行ってきました。自ら求めてこの世界に足を踏み入れ、役割は変化してきましたが、自らの根幹としての建築の設計活動は外せません。今後、組織での役割も軽くなり、外部業界団体での役割も外れ、随分と身軽になれそうです。これからの設計活動が非常に楽しみです。建築の設計が心底好きですし、天職だとさえ思っています。発想力やデザイン力はまだまだ捨てたものじゃないと思っていますし、情報のストックは今がピークだとも思っています。これからが自分の建築設計者として真価を発揮できる最高の時だとさえ考えています。体力のある限りどっぷりとつかって設計に没頭してゆこうと考える今日この頃です。



脇田 幸三 (JIA 愛知)

綜設計 (中村区太閤4-5-18-202 TEL 052-485-6078)

なぜ、吹き抜けなの？

集合住宅に住み始め、窮屈さが時折堪えます。狭さからではなく、堅いコンクリートからくる圧迫を感じます。天井が低く、抜けるところがない。「面積」から「容積」へ、と言われて久しい。経済的に豊かになったはずが、空間は貧しい。

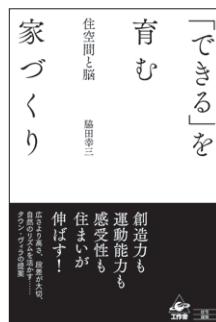
1996年、上に凸な断面の2階分吹き抜けのバルコニーと居間をもつ平屋マンションを提案&出版しました(『樹木の啓示-タウン・ヴィラ=コンチェルト』風琳堂)。特許を取得するほど独創的なものでした。実現するに当たっての障害は、吹き抜けとする建築費のアップです。見合う確実な理由を探しました。

脳科学にヒントがありました。5年ほど本・雑誌を漁り、ネット検索し、専門家にお聞きしました。また幕末から明治の「志あるひとの生家」を訪ねました。

高い天井・吹き抜けが、人の成長に大きな役割を果たします。8・9歳までは特に視覚・聴覚など五感への情報や身体動きが脳を強く刺激します。

脳科学の知見から、個の成長を見据えた空間づくりを見直しました。著書「できる」を育む家づくり(工作舎出版)をご一読いただくか、YouTubeで「脳が喜ぶ住まい」又は「家づくりの9つのポイント」から検索してご覧ください。「大きな朝を迎える」「深い夜を過ごす」「五感を誘う」「ことばと個人の世界が広がる」「たて動きをする」「階段を主空間に」「伸びやかな吹き抜けがある」「感覚刺激に溢れ、家族が集う場」「お気に入りの場」のつくりを提案します。

知的生産施設、保育・教育施設、文化教養施設などの一般建築にも有用です。



「できる」を育む家づくり
工作舎 (2016)

「東海とおきガイド」100回掲載を振り返って

2008年9月号から開始した本連載も2018年3月号で100回を迎えました。約10年間で100人の支部会員から、おすすめの「建築」とその界隈の「食」を、紹介者の物語を交えて紹介いただきましたが、ほかに類を見ない興味深い建築ガイドになりました。以下100件のリストを片手に、会員おすすめの「建築」と「食」巡りに繰り出してはいかがでしょう。さて、本連載は100回で一区切りとし、次回からは新たなテーマで会員の皆さまからの紹介を募る連載を開始する予定です。どうぞ期待ください。

中澤賢一 (JIA愛知) | 会報委員会委員長

No. 建築/食(執筆者名/地域/掲載年.号)[地域:静岡=S、愛知=A、岐阜=G、三重=M]

- 小西万金丹菓舗/かいつの干物(湯谷実/M/08.9)
- 守山区下志段味唐曾地区/ぎやらりーかふえ華野(生津康広/A/08.11)
- 水屋建築、自噴井戸/水まんじゅう(車戸慎夫/G/08.12)
- 丸子丁子屋/久能山東照宮御廟所(村松謙一/S/09.1)
- 岡崎の景色と万年筆(矢田義典/A/09.2)
- 大黒屋の鮎料理(中村久/G/09.3)
- 川原町屋(富田彰/G/09.4)
- そば処井ざわ/そば処安麵棒(眞木啓彰/A/09.5)
- JR掛川駅・北口駅舎/駄菓子屋「すいのや」のおでん(清峰芳/S/09.6)
- 岩内瑞巖寺/焼き肉の野崎(谷川精一/M/09.7)
- 愛知大学公館/菜飯田楽さく宗(富田正行/A/09.8)
- 県立岐阜盲学校/レストランやまだ(塚原進/G/09.9)
- 川奈ホテル/銘菓「みかんの花咲く丘」(稲葉憲一/S/09.10)
- 十州楼本館/とうふや「豆腐」大曾根店(田中英彦/A/09.11)
- 国府の横垣/伊勢志摩の牡蠣(萩原良雄/M/09.12)
- 郡上八幡旧庁舎記念館/ぼたん鍋(村山恒久/G/10.1)
- 伊賀八幡宮・神橋(江戸前)蕎麦寿し(横山正登/A/10.3)
- 石水館(静岡市芹沢鉦介美術館)/あべかわ餅(清峰芳/S/10.4)
- 千歳文庫(現石水博物館収蔵庫)/思い出の味、ポークステーキ(出口基樹/M/10.5)
- 東之宮古墳/清酒小鶴(日比野万喜男/A/10.6)
- 布武(ふぶ)/台湾らへめん(藤井利也/G/10.7)
- 岩科学校/鯨のまご茶漬(鈴木俊史/S/10.8)
- 陸軍技術本部伊良湖試験場施設跡/奥三河の清酒「空」(伊藤彰彦/A/10.9)
- 朝日小学校/レストランテFOOD(川崎貴貴/M/10.10)
- 中仙道加納宿/二文字屋(山田貴明/G/10.11)
- 南山神宮神学院チャペル/ベルギービール(佐竹一郎/A/10.12)
- 木下恵介記念館/PATIS AKIYAMA(樽林廣次/S/11.1)
- 仏光寺山号額「大嶋山」月舟宗胡/河村こうじ屋(萩原良雄/M/11.2)
- 大橋屋/楽屋(藤田義勝/A/11.3)
- 鶉の庵 鶉と鶉匠の家/鮎料理(林直見/G/11.4)
- 大旅籠「柏屋」/青葉横丁(清峰芳/S/11.5)
- 鶉のからまるハンバーグ屋(神谷勇雄/A/11.6)
- 伊勢型紙資料館(寺尾家)/インド村(豊田由紀美/M/11.7)
- 村国座/ルクルールせきや(長尾英樹/G/11.8)
- 赤岩展望台/奥三河五平餅とこんにゃくおでん(鈴木利明/A/11.9)
- 鱈の家/にじます料理(鈴木力/S/11.10)
- 廣永陶苑/千寿「めいふつ天むす」(出口基樹/M/11.11)
- 瀬戸市マルチメディア伝承工芸館/せとカットバーガー(三輪邦夫/A/11.12)
- 西之一色の美しい石垣/飛騨ぶり(西久樹/G/12.2)
- 掛川城御殿/三味くずゆ(棟葉登司夫/S/12.3)
- 万足平の猪垣/木工房うめきん(小林清文/A/12.4)
- 奥山の石清水/R阿漕駅(村林桂/M/12.5)
- 長屋神社本殿/一本茶漬(西川光広/G/12.6)
- 鳳凰山甚目寺観音南大門(仁王門)/もろこ寿司(吉川法人/A/12.7)
- 旧エパーソン邸/鮎漬け井(高田雅司/S/12.8)
- 旧夕日に染まる町工場/本当は教えたくないハンバーグ(松本正博/M/12.9)
- 起雲閣/「多賀」の蕎麦(今泉清司/A/12.10)
- 川原町界隈/川原町の名店の味(加藤友一/G/12.11)
- 世界遺産を目指す葦田反射炉/「華々」の坦々麺(石橋剛/S/12.12)
- 四季折々の神社/うなぎ(宇佐見寛/A/13.1)
- お城が正面に見える通り/西澤のコロッケ(西出章/M/13.2)
- 舞台造り「美濃清水」/みたらしの霊水(西川光広/G/13.3)
- 真福寺/竹膳料理(庭山眞由美/A/13.4)
- 不戦の誓い、鎮魂の塔/清水で唯一本マグロを扱う定食屋(鈴木武/S/13.5)
- 鍵屋の辻の小さな茶店/おかみさんお薦め(滝井利彰/M/13.6)
- 尾州廻船内海船船主内田佐七家/銘酒「ほしいずみ」(齋藤正吉/A/13.7)
- 金華山のみたらし団子/本巢の源氏ホテル(小塚昭幸/G/13.8)
- 県指定文化財の域を超える、西楽寺本堂/もちがっお・うなぎ・浜松餃子(鈴木幸治/S/13.9)
- MittE/CO2WORKSのビル屋上(中渡瀬弘司/A/13.10)
- 伊勢山上/十割手打ち蕎麦の紀乃國屋(伊藤達也/M/13.11)
- 水辺のバードウォッチング/長良川天然ワイン(岡田典久/G/13.12)
- 尚古荘西尾市歴史公園/銘酒「奥」(尊生蔵元)(牧ヒデアキ/A/14.1)
- 伊豆下田・白濱神社/あじーひもの店(増澤信一郎/S/14.2)
- 七里の渡し/鳥居/花乃舎(はなのや)(村久/M/14.3)
- 水路上に建つ商店街「水上ビル」/「水上ビル」の地ビールのお店(黒野有一郎/A/14.4)
- 尾関提灯ビル/めしギフ屋(藤井孝一/G/14.5)
- 静岡銀行本店旧本館/銘酒「志太泉」(伊久美太助/S/14.6)
- 一宮市西歴史民俗資料館別館(旧林家住宅)/明や(あけや)(宮坂英司/A/14.7)
- 鳥羽大庄屋かどや(旧広野家住宅)/富士乃屋のみそ焼きそば(高橋徹/M/14.8)
- 高山の名工川尻治助・西田伊三郎/素朴で洗練された形の干菓子(村山恒久/G/14.9)
- 「災害対策」と「失われる風景」/「食」による「みんなのマチココン」(西村和哉/A/14.10)
- 俳聖殿/月見の献立(池澤邦仁/M/14.11)
- メタボな美術館/ミラーボールと蕎麦(坂部眞彦/S/14.12)
- 海際の集落/へしこ(榎戸正浩/番外編/15.1)
- 日本倉庫羽島営業所/ロデオラウンドアップ(長尾英樹/G/15.2)
- 磐田市旧見付学校/R食堂(渡辺隆/S/15.3)
- めがね橋/体に優しい農業レストランフラル(鈴木道夫/M/15.4)
- 阿漕の町並み/平治煎餅(木下誠一/M/15.5)
- 未知との遭遇/私のお屋、とり天井!(竹中アッシュ/A/15.6)
- 三島の看板建築/銘菓「三島ざくら」(鈴木俊史/S/15.7)
- 諸戸徳成邸/アイスマンじゅう(奥野美樹/M/15.8)
- 須成祭/いな饅頭(黒川喜洋彦/A/15.9)
- 往年の迎賓館、揚輝荘北園聴松閣/スタッフのやさしい気遣い、喫茶べんから(鈴木賢一/A/15.11)
- ローカル線の車両工場/知る人ぞ知るB級グルメ(望月美幸/S/16.2)
- 鉄工所迎賓館「郷亭」/建築と庭を楽しむながらのランチ(山田貴明/G/16.3)
- 財賀寺の仁王像と仁王門/ヤマサちくわ直営店のおでんランチ(河合誠/A/16.4)
- 旅館八百基/愛宕下羊羹(高橋雅志/S/16.5)
- 真言宗山階派丹生山「近長谷寺」/お気に入りのお茶店「マーチ」(中西修一/M/16.6)
- 長久手建築散歩/建築と珈琲が味わえる「松本珈琲工房」(高木耕一/A/16.8)
- 沼津市民文化センター/中央亭(高島ゆかり/S/16.11)
- 三重大図書館ラーニングセンター/三重大カレー(加藤彰一/M/17.2)
- 春霞のかかる旧四日市港/パールコロッケ〜真珠貝を食す〜(阪竹男/M/17.3)
- 高澤観音/しいたけかつ井(岡田典久/G/17.4)
- 天龍の自然に溶け込む美術館/大切な時間に寄り添う一杯(萩原健一/S/17.5)
- 忍者列車/田楽座わかや(西出章/M/17.6)
- 栗林の木陰にあるレンタル自然栽培キッチン/薪オープンで直火焼きした鮎(庭山眞由美/A/17.7)
- 怪談めぐり…(関善光寺)/格別な昭和の味(山田屋)(関野隆久/M/17.9)
- 陶芸空間「虹の泉」/正しい草餅「齋藤正菓堂」(加藤幸範/M/17.12)
- 岐阜市民会館/老舗麵処「更科」(山田浩史/G/18.2)
- 印象に残っていた景観「豊橋市民文化会館」/うどん文化「東京庵豊川店」(山本敏彦/A/18.3)

東海とおきガイド | 三重県 | 湯谷 実 (エム・アール社) |

かいつの干物

かいつとは？ 聞き慣れない魚の角だと知られるでしょうか。じつは東海に産出する魚です。干すも焼くもありますが、干すよりも小魚の、それもこの地域で「かいつ」と呼ぶのが、伊勢・海部両道では10月中旬になると、かいつ節に夢中になるお祭りも多くあります。小さくとも東海の名産品、引継ぎの味が楽しめるという、お祭りならではの楽しみ。遠くまで運ばれていく干し魚は、味ではまず劣らない、この地方の干物です。しかも10月の中旬から11月の中旬にかけて、ほんの短い期間しか干し入らない。場所によっては日に数回、屋中裏で干すことができます。とくに美味しい、漁の夕方に焼く魚、焼くのは干物の主役だと思っています。

干すの角は魚は魚市場の常売物で、「丸鮎」

入船：三重県鳥羽市鳥羽2丁目7-50 TEL.0599-25-2138

小西万金丹菓舗

江戸時代、伊勢には金銀からとるの製菓家が居ました。お伊勢参りは臨時の人だちによって、生菓一度の次イベントだったに違いない。伊勢に金銀に、海産物にとられる万金丹はたいへん好評の菓かお土産でした。外産の近づくに金銀を採るに精進、昔ながらに海産物の菓を造っています。

鍵屋は明治初期のもので、伊勢の民衆の憩い場としてよく使われています。伊勢に現存する民家で、最も規模ある美しい建物のひとつです。

小西万金丹 | 三重県伊勢市八日市場町1-20




隔月6回連載
第4回

木造建築の
語られ方

日曜大工デモクラシー

竹内孝治 | 愛知産業大学造形学部建築学科 講師

2015年、DIYリノベーションやDIY女子といった言葉がメディアにあふれた。DIY=Do It Yourselfは、もともと1940年代英国の戦災復興運動、さらにはヒッピー&ハッカー文化が入り乱れる1960～70年代のカリフォルニアイデオロギーに由来するムーブメントだった。それゆえ、日本の「日曜大工」はDIYの一端を占めるに過ぎないという。「日曜大工」という言葉も戦前には「家庭工作」「家庭大工」などと呼ばれていたが、デザイナー・金子至(1920-2013)が「日曜大工」と名付け流行語となった。金子は秋岡芳夫(1920-1997)らとともにKAKを結成、『アイデアを生かした家庭の工作』(雄鶏社、1953)を出版、テレビ出演や雑誌連載とメディア露出が続いた。素人が木工を通して生活の質向上を図った日曜大工ブームがここに花開く。

ということで、木造建築の「語られ方」を棚卸しする本連載の第4回は、1960年代から70年代にかけてブームとなった「日曜大工」を手掛かりに、専門家ではない人々が木工を通して自らの住生活向上を図った、いわば〈木造民主〉とも呼び得るような状況を観察したい。前回、農村民主化へ向けた〈木造革新〉を紹介したけれども、高度成長期になると、木工を民主主義の実践と結びつける語られ方が登場してくる。

民主主義実践としての日曜大工

その名も『日曜大工』と題する雑誌が1964年、日本日曜大工クラブにより創刊された(後に『手づくり』に改題)。「日曜大工」はまず1960年代に、さらに70年代に入って一大ブームとなった。関連する書籍や雑誌記事も数多く世に出たが、その背景には余暇時間の増加、マイホーム主義の広がりなどがあったとされる。自ら手を動かす喜びを介して、大量生産品が身の回りを囲む家庭を美化することが課題となった。その行為を下支えたのが安価な電動工具(マキタ、東芝など)の普及やホームセンターの出現(日本初は1969年)であったのも見逃せない。

自らも大工仕事に打ち込んだことで知られる民族学者・梅棹忠夫(1920-2010)は「日曜大工」と題する小文を書いている(朝日新聞、1959.1.22)。「アパートというものは、いわば規格化された、できあいの住宅である。その建設には、すむひとの個性

のこのみはなにもはっていない。個人の趣味性は、その規格化された枠のなかで、いかにすまうかという点にだけにしかあらわれない」と。ここに日曜大工の余地が生まれる。

翌年には社会学者・加藤秀俊(1930-)が「ホーム・ドライバーと日曜大工」(中央公論、1960.6)と題した論考を発表。現状では「日曜大工は、せいぜい高いところに棚を吊って道具を片付けるといぐらいのことで、本来のたのしみ目標である、家の美化など思いもよらない」と言う。日曜大工の充実へ向けた行動は自ずと政治問題につながると指摘した。いわば「余暇をたのしめるための政治闘争」が必要なのだ。

日々の労働からの束の間の自由が得られる日曜日。「疎外された労働」から解放される日曜日とは、「それがともかくも彼らに護ることが可能であり、また原則上護ることが許されている唯一のもの」(三島由紀夫「日曜日」1950)だった。そんな日曜日に行う余暇行為こそが木工作業だった。

日曜大工は、雑誌『暮らしの手帖』とも無縁ではない。日常を丁寧に生きるという目指すコンセプトゆえ当然であろう。そもそも編集長・花森安治(1911-1978)自身が日曜大工をこよなく愛し、出版社内に工作室を設けるこだわりぶり。創刊以来ながしかの工作関連記事が掲載され続け、『暮らしの手帖別冊:自分で作れる家具』(1952)の出版、「日曜大工入門」(1967-68)なども連載されている。

誌名にも現れているように主題は一貫して「暮らし」。それは日常性を通じて作用する「ミクロな政治」だ。花森は言う。「民主主義の〈民〉は庶民の民だ、ぼくらの暮らしをなによりも第一にすることだ」、「ぼくらはぼくらの旗を立てる」(「見よぼくら一銭五厘の旗」1970.10)のだと。『暮らしの手帖』は戦後日本の「暮らし」を民主主義実践として再編するメディアだった。自らが主体的に生きるという戦後民主主義実践のために〈木造民主〉としての「日曜大工」がクローズアップされたわけだ。

その一方で、日曜大工ブームの一因は美化したいと思う「持ち家」の存在があったわけで、戦後の持ち家政策が結果として日曜大工や家庭園芸の下地になったのもまた興味深い。日曜大工は戦後を象徴するトピックスだったと言える。

■ ツーバイフォーがやって来た

『暮しの手帖』1977年早春号に「2×4工法で家中が手伝って建てた家」と題した記事が掲載されている。2×4工法(枠組壁工法)の技術基準告示が1974年。その翌年3月から計画し、数カ月かけて竣工した事例のレポート。計画・施工に一家が参加し、あちこちを自分たちの手でつくった思い出の一軒家。セルフビルドは大変だが、「むずかしいところや危ないところはクロウトにやってもらう」という建主参加型の家づくり提案だ。

日本に本格移入されすでに40年以上を経た2×4工法は、構法・構造ともに簡素で合理的な「素人工法」を利点とした。木工事が簡略化されることからコスト抑制も期待でき、熟練技術者の人材不足対策にもなると鳴り物入りで日本へ登場した。そんな2×4工法も、今では「貿易摩擦解消の北米材輸入と抱き合わせで導入され日本の林業を破壊した」とか、「日本の気候風土に合わない」、「素人工法ゆえ大工の仕事を奪い、質低下をもたらした」などと非難される。

住宅版「ブラックバス」のような2×4だが、合理化・価格抑制だけでなく、大工・職人に囲われた家づくりをオープン化する「家づくりの民主化」の尖兵として期待された側面を持っていた(『ツーバイフォーのすべて』、日本経済新聞社、1975)。住宅のオープンシステムやコスト抑制を模索する建設省・通産省の動向に官製(木造民主)の語りを見出すことができよう。

記事で紹介された現場の設計施工をサポートしたのは、庶民派住宅を数多く手がけた建築家・加納敬二郎。加納は作品集『現代の住宅: ツーバイフォー』(1979)のほか、ズバリ、『建主参加の住まいづくり』(1982)と題した著書も持ち、「建主参加の住まいづくりメイトの会」を主催したことで知られる。建主参加は、建築家・大工・職人と施主の接点が増えて技術習得の機会となるのはもちろん、夫婦や親子のつながりを深める。さらにわが家への愛着や住居管理のリテラシーを高めるとした。家づくりが教育・学習の場として機能するのだということ。日本への2×4工法移入には、「大工・職人に囲われた家づくりの民主化」そして「住まいづくり参加を通して生きる力を養う」といったロマンが込められた(木造民主)の語りも垣間見られる。

「2×4工法で家中が手伝って建てた家」が掲載された1977年は花森が亡くなる前年にあたる。花森は当時、高度成長期の保守化傾向が戦時の思考様式と似ていることを懸念し、国家や資本主義、公害、食品添加物等への批判を強めていた。そうした中、大手ハウスメーカーが幅をきかせる住宅産業へのオルタナティブとして2×4工法の建主参加型家づくりは取り上げられた。花森安治は加納敬二郎の試みに、戦後日本の民主主義実践を見出したのだろう。

■ 素人の玄人化／玄人の素人化

加納敬二郎が「建主参加」の着想を得たのは、渡米時に偶然参加した家づくり現場からだった。建主と職人が力を合わせた家づくり。それを可能とするのは、マニュアルブックの普及やホームセンターの充実した品揃えなのだを知る。言い換えるならば、つくることから遠ざけられてきた素人の参加実現は、生産手段の進歩＝工業生産によって実現する。「手づくり」を規格化・工業化が支えるというねじれた関係でもある。

高度成長を経た日本において「ぼくらの暮し」を取り戻す(木造民主)の実践は、1970年代後半には頑なな「修道院主義」から、ある程度の妥協により社会に馴染ませていく「俗化主義」へと転換していった(中山茂『科学と社会の現代史』1981)。日曜大工も商品化されたキットを組み立てることで、わずかながらも「ぼくらの暮し」を充足させる楽しみへと後退していく。そんな日曜大工を梅棹忠夫は「木工業のイミテーション」、「趣味としての擬似木工業」と指摘した(『情報の考現学』1988)。

素人の参加を下支えする生産手段の進歩。その構図の延長線上にはどんな世界が見えるだろうか。建築家・村野藤吾(1891-1984)は1960年代に「デザイナー無用の論」を語っている(『わたくしの建築観』1965)。「生産手段そのものが進歩すれば、それに加わる人間労働もまた、労働の質的変化を被ります。そしてつまりは素人でもできるような状態になってくる。特別に建築家を通じて、いわゆるデザインのようなものをしてもらわなくても、だれにでもできるような社会になってくると思う」として「われわれの生活にとって一番必要なもの(=われわれが気持ち良く生きてゆくこと)をアレンジすることだけが、建築家の任務」だと語った。現に建築家っぽいデザインは口当たり良くパッケージ化された工務店支援ツールになって久しい。

ところで、日曜大工ブームの背景には職人の質低下もあったという。「素人の「玄人化」は玄人の「素人化」という残念な事実と表裏の関係」(白水繁彦「日曜大工」1977)だという指摘は示唆的だ。BIMやAIが今後さらに発展しても建築家は無用にはならないだろう。ただし、建築を知らずとも建物がつくれる状況は補強されていくとすれば、むしろそれは、村野藤吾が「いらなくなる」と予言したはずの「デザインのようなもの」こそが前面化する「玄人の素人化」となるだろう。そうした動きとどう間合いを取るのかがあらためて問われる時代にある。



たけうち・こうじ | 専門は日本近代建築史。木造住宅メーカーの実務経験から得た問題意識をもとに、戦時から戦後にかけての住宅計画・生産・供給、わが国における住宅産業の歴史などについて研究している。主な論文に「建築家・内田祥文の「国民住宅」構想に関する研究」、「イラストレーター・真鍋博の未来都市観に関する研究」などがある。

2月24日～25日の日程で、入会5年以内の会員を対象にした「JIAフレッシュマンセミナー」が開催された。今回の開催地は金沢。全国支部より20名近くが参加、東海支部からは静岡・愛知・岐阜から1人ずつ計3名が参加した。

金沢を訪れたのは今回のフレッシュマンセミナーで5回目となります。以前より金沢のまち、建築、文化を堪能して参りましたが、今回のイベント参加によりさらに金沢が記憶に残る都市となりました。

まち歩きに先立って水野先生、坂本先生のレクチャーがあり、この講義がまち歩きをより深いものへと導いてくれました。金沢の地形を5本指に例えることは非常に理解しやすく、資料の古地図とともにまちの発展の歴史を感じ得ました。ぜひとも名古屋版のまち歩きツアーを企画したいものです。

懇親会ではスライドによる自己紹介の時間があり、全国から集まる参加者の仕事・活動を知りえる貴重な時間となりました。地域性による建築への捉え方の差を感じながらも、自身の今後の活動へのよい刺激となりました。また愛知地域会で発行したフリー冊子『建築家+(プラス)』の配布・アピールもできて、北陸支部の方からの参考にしたとの声は非常に嬉しく、職能団体としての課題を共有できるのではないかと思います。余談となりますが、2次会にて皆で平昌五輪のカーリング女子の銅メダルの瞬間を共有できたことも参加者が打ち解けるきっかけとなり、その後の実りある建築談義に結びつきました。

最後にフレッシュマンセミナーの運営に尽力された講師の先生方、北陸支部の皆さま、フェロシップ委員の皆さま



上原徹也 (JIA 愛知) |
ファンズマイル / 上原設計

に深く感謝申し上げます。

今回のセミナーは入会1年目の私にとっては大変有意義な学びの場となりました。

JIA 活動に関しては、支部長やフェロシップ委員の方々から講義や歓談を通し、JIAの

歴史やUIAの国際性などについて伺いました。主要な方々からの言葉には力が籠っており、JIAの課題や将来に向けた展望を語られる姿から、機関を構成する人の姿がとても大切であると感じました。そして、参加者同士の交流を通じ、自らが求める建築家像をさらに描き求め、その先にある職能集団としての発展も大切なことだと実感しました。

また、古都・金沢は城下町の構造をそのままに、工芸と建築が人々の生活に息づく魅力的な都市であると感じました。特に都市の構造と歴史について講義をいただいたことで、まち歩きで得られる情報量が増し、都市の魅力をより深く体験できたと思います。

さらに、歴史ある建物やまち並みの保存継承と、未来に向け新しい価値の創造付加が私たち建築家の役割であるとお話しがとて



事前のスライド講義で知識を深めた



まち歩きの様子



懇親会では、全国から集まる参加者の仕事・活動を知ることができた

も印象に残りました。あらためて、後世に継ぐべき建築を読み解くためにも歴史や文化について、さらに見聞を深めていきたいと思います。

今冬、北陸地方は例年にない豪雪に見舞われ、セミナーの準備や運営にあたっては多くのご苦労があったと思います。かかわられたすべての皆さまに心から感謝申し上げます。



及川博文 (JIA 静岡) |
エム・オー・エー グリーン・サービス

まず、当日の設営・準備をいただきました委員会の皆さま、担当支部の皆さま、本当にありがとうございました。

金沢は、昔一度だけ行ったことがあります。今回のセミナーでは、まち並み散策の前にスライド講義があり、予備知識を得てからまちを見ることができました。実際にまちを歩きながらも講義は続き、より理解を深めることができました。特に、初日には金沢の歴史とまちづくり、城郭の名残やまち並み保存について体験し、歴史と新しいおもてなしのまちづくりは、岐阜にはないものばかりで感動しました。

また、懇親会やその後作品発表会では、参加者の皆さんの日頃の仕事を知ることができ、宿泊先も仏壇屋さんをリノベーションしたシェアホテルで、とても勉強になりました。2次会もシェアダイニングで行い、とても楽しい時間になりました。

2日間では足りないボリュームがあり、楽しくあつという間の時間でした。委員会の皆さま、担当支部の皆さまのご配慮により、大変貴重な経験をさせていただき、セミナーに参加して本当に良かったと思いました。本当にありがとうございました。



内田実成 (JIA 岐阜) |
内田建築設計事務所

「掛川市森林組合新事務所」を探访する

山育ちのせいか、海より断然山が好きです。旅先で偶然通りかかった山あいの集落に、初めて訪れる場所なのにどこか懐かしい心地がして心惹かれます。

今回、建築ウォッチングで訪れた「掛川市森林組合新事務所」(村松篤氏設計)も、そんな里山の風景に馴染むような佇まいでした。建って間もない建築が、「馴染んでる」と感じることはそうそうありません。敷地手前から見通せる絶妙な建物配置と、山々の稜線と重なる建築の形態だからでしょうか。そこには、この地域コミュニティの拠点となるべく、訪れる人を優しく迎え入れようとする設計者の思いをくみ取ることができます。

外観は、見ようによっては挑戦的な形ともいえますが、屋根が緩勾配の切妻断面かつ片流れ(写真参照)のため、意外とやわらかい印象を受けます。薄い屋根をすっとかけたような、とても言いましょうか。後ほど内部を見ると、平面形状が矩形ではなく台形でしたので、なるほど、その微妙なずれも影響しているかもしれません。

建物に入って、まず目に飛び込んでくるのが、内部空間の要となる木トラスの連なりと、その間を覆うウッドパネルによる「森の景色」です。目線に沿って屋根勾配が下がってくることにより、パースペクティブが強調され、ある種の迫力を感じます。木という木に囲まれ

ながら、山小屋のような田舎臭さを感じないのは、一つは材の少なさ、そして洗練されたディテールにあると思います。天井と内壁に使用しているウッドパネル(正式名WOOD.ALC)が、垂木レス、間柱レスで、耐力壁、内装仕上げも兼ねているため、そのなせる業でしょう。最初外観を見たときの屋根の軽やかさは、“垂木レス”によるものだったのかと納得した次第です。

構造材の形状やディテールについては、構造設計者の山辺豊彦氏の手腕も大きかったと思います。その後の講演会では、この形に至るまでの提案の経緯や中規模木造建築の可能性についてユーモアを交えてお話してくださいました。

建物見学の後には催された講演会では、各々の立場からお話いただき、その内容は、これからの設計という仕事のあり方を考えさせられる大変興味深いものでした。

「若い人が胸を張って、周りに紹介できる職場でありたい」とおっしゃったのは、施主である掛川市森林組合代表理事組合長の榛村航一氏です。以前は、スペースさえあればいいだけの事務所だったとのこと。ここまでこぎつけたのは、林業に携わる若者を育てていくという強い信念のもと、さまざまな軋轢、説得を乗り越えてのことだったと、お話の中で垣間見ることができました。

そんな思いに正面から取り組み、敷地選びから、設計者選定、施主と設計者の調整活動を行った、建築プロデューサーの佐藤雄一氏の働きも、今回のプロジェクトに大きな影響を与えたようです。前述、「これからの設計という仕事のあり方を考えさせられる」と感じたことの一つに、彼のような存在があります。施主を説得するのは設計者の責務です。私自身日々の業務の中で、そのことは肝に銘じてやってきました。しかし、形が見えないものにお金を出す立場と、提案するものの価値を自ら訴えながらつくる立場、この関係性に限界があるのも事実です。結果的に、こちらの本来の意図や思いが伝わらず実現できないこともしばしばあります。第三者の立場で、施主の思い、設計者の意図をくみ取り調整してくれる人間がかかわることにより、建築の出来は違ってくるのだらうとあらためて感じた次第です。

建築プロデューサーを通じて提示された施主の要望(個人的には、かなりの難問だと思いました。)に、設計者の村松氏は見事に応えきったといえると思います。

今回の見学会+講演会を終えて、よく言われる「施主+設計者+施工者」という理想の三角関係は、これからは、多角形や複雑な形に変貌していくイメージをおぼろげながら持ちました。施主側には、前述の建築プロデューサー的な人間がいて、設計者も意匠設計者、構造設計者が独立しており、施工者も一括請負の形から、そのプロジェクトに適した業種が分散されてくる傾向にあります。その中で、私たち設計者が司る業務の範囲も多岐にわたってくるため、設計理念はぶれずに、方法論はフレキシブルに立ち回る必要性を強く感じた一日でした。

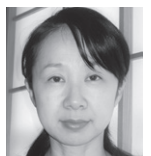


里山に佇む建物



トラスとWOOD.ALC

望月美幸 (JIA 静岡) |
望月美幸建築設計事務所



「住宅市場の現在」を体感!

2月9日(金)午後、三河地区での持ち出し役員会および例会と合わせて、蒲郡地区でのCPD研修会が実施されました。

恒例として年1回、三河地区会で企画し、昨年度は、9月に「あいちトリエンナーレ2016」の会場視察として、豊橋駅前で行われました。

これまで東・西三河で隔年に担当してきた持ち出し役員会および例会ですが、東・西三河がひとつの地区会となったことで、毎年、三河地区内のどこかで開催することになったため、いわゆる“ネタ探し”に奔走しなければならなくなり、今年度は、研修に最適な“ネタ”が見当たらず苦労をしました。昨年度の豊橋での開催から、豊橋以外のエリアでの開催ということで、蒲郡市大塚にできた「SHARES (シェアーズ) ラグーナ蒲郡」での研修を打診したところ、ご快諾いただき、今回の開催となりました。

「SHARES (シェアーズ) ラグーナ蒲郡」は、三河湾を臨む複合型リゾート施設「ラグーナテンボス」やトヨタやJR東海などの出資による全寮制の中高一貫校「海陽学園」、建設が進む「ラグーナベイコート倶楽部 ホテル&スパリゾート」(<https://baycourtclub.jp/laguna/>)などに囲まれたエリアに2017年4月にオープン。「泊まれる住宅展示場」として話題を集めました。

広々とした敷地内に14棟の「パビリオン(モデルハウス)」と4棟の「小屋」と呼ばれるロッジのような小建築のほか、ショップ&シェアオ

フィス棟がいずれも波静かな湾を向いて並びます。14のパビリオンは、「ガーデンエリア」、「オーシャンエリア」、「アウトドアエリア」に分けられ、4つの「小屋」は、「キャンピングエリア」に位置します。当日は、「オーシャンエリア」の4棟と、「ガーデンエリア」の2棟を観覧。宿泊やメンテナンスの状況によって、観覧できるエリアは日毎に替わるとのこと。このうち「OM-WORKS」、「VOLKS-nR」の2棟は、空気式太陽熱利用のパッシブソーラーシステムでお馴染みのOMソーラー協会のパビリオンで、当日、OMソーラー協会から担当(数下靖弘さん)にお越しいただき、説明を聞くことができました。

視察を前に、運営担当の山田剛さんより施設の特徴や「泊まれる」という斬新な運営方針などについて解説していただきました。運営主体の住宅アカデメイアは、フラット35を中心とした住宅金融サービスを提供する日本モーゲージサービス、住宅瑕疵担保保険のハウスジーマンの関連企業。蒲郡に続いて、軽井沢にも「class vesso」(<https://www.maruhabi.com/>)という別荘タイプの6つのパビリオンを提案しているとのことでした。

各パビリオンは、旅館業法などの規定があって、延床面積25~30坪までの規模におさえられ、建設費用も1千5百万円前後で各ビルダーが建設しているとのこと。住宅建設や購入を考えていないヒトも気軽に宿泊でき、ロケーションの良さもあって、週末はほぼ満室

だそうで、2名~4名までの宿泊で、一泊3万円くらいから。ファミリーや女子会だけでなく男子会が意外におおいのだとか。通常の住宅展示場のように棟毎にビルダーの営業を置かず、SHARESスタッフが全てのパビリオンを説明できるそうで、“ガツガツ営業しない”ところも人気の理由とも。

宿泊による利益の一部は、各ビルダーにも還元されるとのことで、モデルハウスの建設や維持管理の負担軽減にも役立っていると聞いて、アイデアに感心しました。宿泊人気に差があるとのことでしたが、人気不人気の別を詳しく聞けなかったのが心残りでした。

やはり見比べると、これがイイとか、ここがヨクナイとか、建築家としては、このプランニングはいただけないとか、このおさまりで大丈夫か?とか、もちろん感心するところも多々あり、さまざまに思い感じることはありましたが、いずれにしても、「住宅市場の現在」を体感することができました。

「SHARES (シェアーズ) ラグーナ蒲郡」

【お問合せ】

TEL:0533-59-7400

URL:<https://www.shares-gamagori.com/>

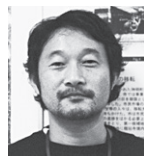
【アクセス】

愛知県蒲郡市海陽町2-7-3

車:東名高速道路「音羽蒲郡IC」より25分

電車:東海道本線「三河大塚」駅より徒歩15分

黒野有一郎 (JIA 愛知) |
建築クロノ



センターハウスでの住宅アカデメイア・山田氏による事前解説の様子。斬新な運営システムについてお話しいただきました



OMソーラー協会の数下氏の解説でパビリオンを視察



研修後の三谷温泉「平野屋」での“温泉入浴つき”懇親会の様子。温泉に入って、いつもよりリラックスした懇親会になりました

他大学、海外からの受講生も参加

昨年度より名古屋市立大学の3年生を対象に「建築家の仕事」をJIA愛知が受け持つ講義をしています。

今期は、昨年9月29日(金)から1月26日(金)まで15回講座があり、14回を建築家の講義、最終回はA3版レポートによる評価をいたしました。

第1回の授業は、徳島での全国大会と重なり休講にするのか悩みましたが、振替の負担も大きく担当講師の調整をしながら行っています。

また昨年度の講師が、一人抜けた穴を同規模の大手事務所の会員に代わってもらいシラバスに対応した人選を行っています。

最終講義のA3版レポートでは、この授業を通して感じたことを率直に書く学生もいれば、社会や環境、これからの建築家像、また建築の新しい提案に至るまでさまざまなものが提出されました。そこから、当日参加された講師会員により興味の沸いた作品を各々取り上げ、建築家のコメントとともに学生の発表、そして質疑と内容の濃い授業で終了しています。

われわれが学生だった頃は、こういった内容の授業はなく羨ましくも感じますが、逆に会員でもある講師の方が力も熱も入っており、JIAの活気と層の厚さをあらためて感じました。

今回は、大学連携の単位認証制度により、

他大学2校から3名の学生が受講していたのと海外からも聴講生が参加しています。

その中には、JIA愛知の小学校建築教室の授業にもボランティアで参加した学生もいて、建築家のフィールドワークも含めて生の活動と一緒に体験してもらったのは、とても大きな成果だと思います。来年度も授業を行っていきま

すので今期の反省も踏まえ生かしていきます。この大学特別委員会に興味のある方はお気軽にお問い合わせ下さい。一緒に活動していきましょう。

久保田英之 (JIA 愛知) |
愛知地域会長・
久保田英之建築研究所



「建築家のリアル」知る

2年目を迎えたJIA愛知のメンバーによる「建築家の仕事」。昨年度は初めての試みということもあり、期待と不安の入り混じるスタートでしたが、今年は講師の皆さんの話ぶりには少しばかりの余裕も見られ、また同時に昨年の経験を踏まえたバージョンアップもなされ、いよいよ軌道に乗り出したという印象をもちました。

最終回、14回の授業を受けた学生たちの反応は多彩で多様です。学生と建築家のクロストークは、予定調和的なストーリーで進められない緊張感がありました。「人生の大半を過ごす建築は、生き方までも影響を与える

のではないか」、「いずれ人がいなくなり建築だけが残るまちを想像する」、「建物を作るだけが建築家ではないと感じる」、「AI技術を駆使できる構造デザイナーになりたい」などなど、建築の状況に対する反応と将来への展望が見え隠れしました。

話題を提供する建築家一人ひとりにとっては、自分の取り組みが20歳前後の若い学生たちの感性、知性にどう受け止められるのか、リトマス試験紙のごとく作用しているように思えます。何人かの方が「立ち止まって自分を振り返るいい機会になっています」と口にされました。

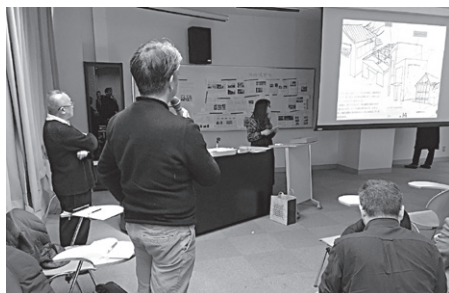
大学の授業は基礎から応用へと幅広いものがありますが、すでに評価の定まった「学と論」がベースになっています。「建築家の仕事」の最大の特徴は、現役の建築家が歩んできた、あるいは進行中の「現実」が語られることです。しかも、その現実、講師一人ひとりの個性と極めて幅広い建築の領域として、学生に示されます。学生にとっては、いかに多様な選択肢が広がっているかを知ることになり、あらためて今自分が大学で学ぶことの意味を思い返すきっかけになります。「学と論」が「現実」にどうつながってゆくのか、考えざるを得なくなります。

愛知学長懇談会による単位互換のカリキュラムに入れていただきましたので、県内の学生はいつでも受講できます。今後受講生がより広がってほしいものです。

鈴木賢一 (JIA 愛知) |
名古屋市立大学



講義の様子



不易流行

去る2月9日、三重地域会では、法人協力会員であるサンコー三重支店・疋田勉支店長のご紹介により、シンコーの「マグネット壁装材」、そしてリンテックの「デジタルプリント内装材」についての講習会を開催しました。

当日は、例の北陸地方何十年ぶりかの大雪の影響で、シンコーの講師予定の方が三重に来られないというハプニングもありましたが、研修委員長の伊藤達也さん、疋田勉支店長、そしてシンコーの講師・錦見太さんのアドリブで、何とか無事研修会を終えることができました。

今回は数ある壁装材の中でも、内装制限の規制のある部分にいかにか意匠的な空間を演出できるかという提案と、一般の壁装材にない特殊な機能を持つ材料の紹介をいただきました。

特に「PAROI (パロア)」については、業界初という、粘着剤付化粧フィルムにデジタルプリント加工を施した製品で、

データさえあればどのようなものでも、壁装材のみならず、建具、ガラス面、システムパネル、サインなどに使えるということです。また、防火認定、4☆認定も取得し、水廻り用に防カビ・抗菌仕様の製品もあるということなので、使用制限もないということです。

実際に現物サンプルも見せていただきましたが、グラステックス(ガラス面装飾フィルム)では、マンションからの「隣地目隠し用フィルム」や、裏表で異なるデザインを施した「装飾フィルム」などに会員から感嘆の声が上がっていました。もう一つ、レリーフパネル(内装用3D装飾パネル)は、三次元加工されたケイカル板に「パロア」を貼り込んだもので、興味を持った会員からは、「一体どのように製造するのか」と質問が集中していました。これらは、とても文章では表しきれません。実物をぜひご覧になっていただきたいと思います。

しばらく実務から遠ざかっている身としては、技術の進歩に驚くばかりです。どんなものでも工場生産で製作できる世の中になったことを痛感しました。壁装材としてはプリント物なので、いろいろご意見があるとは思いますが、伝統工法の職人さんが少なくなり、現場で時間をかけて作り出すことが難しくなった現在、できるだけ簡素化、パネル化して、特殊な技術を使わずに現場で組み立てられる、ということも必要なのではないでしょうか? というか、現実にもそのように変わってきていると感じます。伝統を守る場面と、最新の技術を利用する場面との使い分けが必要ではないでしょうか。俳聖芭蕉風に言えば、『不易流行』の精神を感じる研修会でした。



松本正博 (JIA 三重) | 上野建築研究所



研修会の様子



snapshot から inspire された建築感

早いもので、表紙シリーズを担当して1年が経ちました。このお話をいただいたとき、建築の写真だけでなく、もう少し幅広い視点で捉えた写真で構成したいという漠然とした思いがありました。とは言うものの、さてどのようにそれらの写真を「建築」と絡めて語ろうか…。そこで、私にとって写真とは何かと考えてみると、仕事とはまったく別の趣味であるものの、やはりものを見たり、構図を考えたり、何かを感じたり…そこには「建築」にも通じる感性や気づきがある。そこで、「Inspire the next」と題し、「創造のきっかけとなる気づきを感じたシーン(瞬間)」をテーマに、12枚の写真を掲載してきました。

今やスマホには皆カメラが付き、SNSには毎日大量の写真がアップされる「全国民総写真家時代」。今さら私がとやかく言うことでもないですが、最後にもう少しだけ、写真について書いてみようと思います。

今回の表紙シリーズは、まずモノクロという条件がありました。モノクロ写真は、カラー写真と

比べ、その場の空気感を伝える情報が限定されます。一方、情報が少ない分、よりコンセプト的な写真になる可能性ももっています。そうすると、そこに写るノイズが気になりはじめ、現像のハードルはより高くなる。難しくなると悩みますが、それがまた楽しい。建築と同じですね。

そして、次にレンズの話。ライカの醍醐味は、そのボディもちろんですが、やはりレンズにあります。職業柄皆さんもそうかもしれませんが、やはりはじめは広角レンズが主流になり、18mm、そして12mmのレンズからはじめました。しかし、しばらくすると広角レンズの歪みとパノラマ感が、被写体のイメージを拡散させてしまうと感じてきます。そんな時、「写真家の村井先生は極度



愛用のレンズたち

な広角のレンズを使わない」というエピソードを思い出すのです。そうこうしているうちに35mm、そして最後は50mmへと落ち着きました。とはいうものの、カメラを持って出かけるときは、レンズは一本だけと決めています。「今日はどんな写真を撮ろうか」と考え、レンズ特性を踏まえて選んで出かける楽しさを与えてくれます。

年に3回程度、名古屋ライカクラブで写真撮影に出かけています。そこでは私が見落としてしまうようなわずかな瞬間を逃さず捉える優秀な先輩方がたくさんいて、多くのことに気づかされます。ライカ(レンズだけでも)をお持ちの方で、ご興味のある方はぜひご一報ください。

拙い写真と文章でしたが、皆さまにも何か「気づき」を感じていただけるシリーズとなっていれば幸いです。一年間どうもありがとうございます。



降旗範行 (JIA 愛知) | FULL POWER STUDIO

● 愛知発『建築家+』発刊

一般の方々への広報・接点として

『建築家+』発刊は、久保田愛知地域会長の肝入り事業として、2016年12月に委員会が立ち上げられた。皆さんのまわりに住宅からオフィスビル・病院・庁舎まで設計するいろいろな建築家が近くにいることを伝えたいという思いがスタートだった。

出版事業は、特定日のイベントに高揚感をもって盛り上がり終りを迎えるものではなく、全会員の総意と公平性を保ちながら、議論を重ね行っていかなければならない。建築家とJIA愛知を紹介する冊子の構成とはどんなものか、委員会では相当の紆余曲折があった。

2017年2月よりJIA会員だけでなく、編集者として寺井真理さん伊藤幸子さんを交えて本づくりの視点を見直す機会ができたことが、この事業成立のキーストーンとなった。

しかし、当初は建築家・JIAとしての品位のようなものが重荷となり、「売れなくてもいいから本を出したい」という所まで極まった時期もあった。

結果、さまざまなイベントを通じて一般の方々に気軽に建築家・JIAを紹介できる冊子を手渡したい気持ちが冊子のあり方・構成をシンプルなものにしなが、パラエティに富んだ内容になった。

また、情報発信活動(豊橋:水上ビル)に長けている黒野さんが編集長としてブラッシュアップし、冊子のコンセプトを表す「建築家+」

というタイトルをネーミングしていただいた。

すでに、国会図書館を初め県内の図書館112館とJIA本部理事、各支部役員・全地域会長に発送し、事業活動の中で市名大、猪高小学校の皆さんにも配布した。

次号でも、さまざまな建築家(会員)に登場していただき、エリア特集ではそのエリアの建築家の活性化を図り、継続できればと思う。

最後に、『ARCHITECT』が会員向けならば、『建築家+』の発刊は、一般の方々への広報・接点として、愛知が全国に先駆けて手掛けた画期的JIA事業ではないかと思えます。事業予算に余裕のない中で贅沢な事業(約100万)となりましたが、継続発刊の意義・費用対効果は決して低くないと信じています。

高嶋繁男 (JIA 愛知) |

建築家マップ特別委員会委員長 / 黒川建築事務所



今回は名駅エリアを特集した

名古屋城木造復元について

東海四県でも最大級の公共工事になるはずの本件について、EV設置問題も含め、十分な理解を得るための議論が必要ではないでしょうか。そこで、愛知地域会保存研究会・原委員長に、その意義と影響について意見をいただきました。

中澤賢一 (JIA 愛知) | 会報委員会委員長

「名古屋城木造化」について執筆依頼があったが、正直、あまり気乗りのしない企画だった。名古屋城天守(本丸)の木造復元については当初より賛否両論大きく二分されており、市民の意見はどちらとも言い難い状態で平行線をたどっている。ここで木造化賛成と書けば大いに反対の声が聞こえてこよう。昨今の情勢を見るにつけ政治がらみに巻き込まれるのは真っ平なので、賛成、反対は別として純粋に木造化について書いてみたいと思う。

3年ほど前、3つの大規模天守の木造復元構想が相次いで発表された。日本の城郭の歴史の中でも最大級の規模を誇った江戸城(東京・千代田)、駿府城(静岡市)、名古屋城(名古屋市)の3城で、いずれも江戸時代を代表する大天守である。

NPO法人「江戸城天守を再建する会」は当初2020年を復元目標とし、東京オリンピックの目玉と考えていたようだが、建造費350億円という高額な見積りのため、復元の用途は立っていない。駿府城天守は規模としても江戸城天守と並ぶものであったが、現在は天守台もなく更地の体をようしている。3つの復元天守案の中で天守が唯一現存する名古屋城は、戦前の旧国宝第一号だった木造天守が1945年の空襲で焼失した後、市民の寄付により鉄筋コンクリート造の大天守+小天守として再建された。当時、このために寄付金などで支援した市民からすれば、天守の建て替えなど到底許しがたい心情ではと察することができる。実際にそういった声をあちこちで耳にするのも現実である。

戦後、城跡に建造された天守の多くは鉄筋コンクリート造であり、史実とかけ離れた例も多いと聞く。これでは単なるテーマパークの建造物としてしか見ることはできない。では木造の天守で史実に忠実であれば復元しても良いのかということになるが、これも賛否両論だ。

江戸城や駿府城と違い、名古屋城の天守は旧国宝に指定された際に詳細な図面と豊富な写真が残っている。これが「木造復元」の根拠のひとつになっている。現在文化庁は文化財保護の観点から明確な資料に基づく伝統的な木造構法以外の復元は認めていない。これまで木造で復元された天守は、白石城(宮城県白石市)、白河小峰城(福島県白河市)、掛川城(静岡県掛川市)、大州城(愛媛県大洲市)の4城のみで、比較的小規模な天守ばかりである。天守の復元には膨大な費用が必要で名古屋城天守の場合、ゼネコンの工事費見積金額は500億円とも言われている。1959年に鉄筋コンクリート造で建てた天守が9億円余、そのうち寄

付金が3億円。現在工事中的の本丸御殿の工事費が150億円余で、寄付金が50億円余と言われている。推定500億円の天守再建費用の寄付金を150億円から200億円集めたとしても、残りの費用は市民の税金から出さざるを得ないだろう。500億円すべてを寄付金で賄えれば次の世代への継承の心配は無用になるが、ここが一番のネックか…。

一方、建築基準法に照らし合わせると頭から実現不可能な話となるが、法律は時代とともに変化するのが常なので法律云々で論ずるのは今回はやめにする。ただ、江戸城天守、駿府城天守、名古屋城天守のいずれも火災による焼失なので消防という観点だけは十分検討する必要があるように思う。また、地震による倒壊の心配もあるが、地質学者がいつも言っている「日本列島という場所に建てる以上、壊れない建造物を造ることは到底無理な話」には納得せざるを得ないのも確かである。全壊による人身災害を防ぐ手立てを真剣に考えるのがわれわれのせめてもの使命であろう。

木造天守復元は伝統構法の継承や研究や調査の進展による学術的な貢献も多いに期待できる。この点だけに重きを置いて考えるならば天守の木造復元は多めに考慮すべきことかもしれない…。先日の文化庁の発表によると「無形文化遺産保護条約関係省庁連絡会議」において「伝統建築工匠の技術造建築物を受け継ぐための伝統技術」がわが国からの本年度のユネスコ無形文化遺産(人類の無形文化遺産の代表的な一覧表)への提案案件として決定した。今後は、3月末にユネスコに提案書を提出し、2020年11月頃に開催されるユネスコ政府間委員会において審議が行われる予定だ。(外務省同時発表)

「伝統構法」をユネスコ無形文化遺産に登録するための運動を立ち上げ3年間活動してきた成果として、この文化庁の発表は非常に喜ばしいことであり、今回の申請の対象になった国の文化財の一種「選定保存技術」に指定されている14分野の技術は伝統構法のもっともコアな部分でもあるが、「保存修理技術」だけではなく「庭屋一如」と言われる日本建築になくはならない分野にまで範囲を広げていきたい。そのためには天守の復元は最良の方法のひとつであり、ここにJIAの会員がかかわることができればと考えるのは私だけだろうか…。



原眞佐実 (JIA 愛知) | 原建築設計事務所

東海支部役員会報告

「名古屋城天守閣の木造での建替え時にエレベーターを設置しない件」について11月24日の第6回役員会にて議論しました。このような議論を役員会や『ARCHITECT』誌上にて行うことは会にとって貴重だと思います。そこで今回の支部役員会は議題が少なかったため誌面をお借りして、私見を書かせていただきます。

永年に渡って親しまれてきた中日ビル（高校三年生1963年）や丸栄百貨店（リング追分1952年）・旧東海銀行本店（上を向いて歩こう1961年）の解体が発表された。建築にはいつかは寿命が尽きる時があり、ソフトに合わない部分も出てくる。建築の使いみちに知恵を出すのも建築家の職能だが、いちばん大切なのは有名建築や文化財を残すことだけでなく街場の普通の建築が天寿を全うでき、人々の記憶の背景として世代を渡ってつながっていくことである。

分子生物学者の福岡伸一によると、20世紀において生命は「遺伝子の乗り物」と考えられた。デカルト主義者は、人間は部分からできていて交換可能と考え、とうとう遺伝子まで操作しだした。しかし、ワトソンとクリックが遺伝子の二重らせん構造を発表する前に、ルドルフ・シェーンハイマーは「食物として取ったタンパク質はエネルギーばかりになるのではなく、常に体内の他のタンパク質と交代している。」人間の体は何カ月かの間に全く違う分子に置き換わっていることを突き止めた。「生命」とはエネルギーの不可逆的な流れが淀みをつくることであり、人間は「うつわ」ではなく「ながれ」なのだ。これを「動的平衡」と福岡は名付けた。

古いまち並みに調和する建築という瓦屋根や面格子などを付けて修景する考え方がある。しかし、まちは自然環境・インフラ・築き上げられた人間関係などが複合したものであり、生きているものだ。ある時代を設定してその時の姿に復元することではまちの魅力が死んでしまう。まちの本質を読み取り、現在の技術や関係性を取り込んで「生きたまち」にしていかなければいけない。木造の伝統技術についても時代に合わせて改革が必要だ。（法隆寺と重源の東大寺では違うはずだ）

名古屋城の再建天守閣（南国土佐を後にして1959年）を取り壊して木造で建て替える計画が進められているが、民主主義の市民社会に近世封建主義の城郭をつくることに大切な意味があるのだろうか。これからは何が大切かを市民自らが考え始めるべき時代だ。

「鉄の男」と言われた建築家・広瀬鎌二が伝統建築を研究し、金物を使わないで木造の自邸「肆木（しもく）の家」（1/2の神話1983年）を完成させた。手刻みで制作したが将来はCADと連動したプレカットシステムでの制作を考えていた。「木は育った年数だけ使える。200年育った木を使えば200年使える」そのために脆弱な現代の鉄とコンクリートを排除した。古谷誠章氏に語ったところによると失敗した点があったとの事であった。鎌倉の斜面に建つ三層の住宅にはEVが無く、車椅子生活を送った晩年に大変不便だったそうである。先生の無邪気な笑顔が思い起こされた。

吉元 学（JIA愛知） | ワーク・キューブ



日 時：2018年2月23日（金）16:00～17:30

場 所：JIA 東海支部事務局 会議室

出席者：支部長・本部理事・幹事10名・監査2名・オブザーバー7名

1. 支部長挨拶 中部地方整備局との話し合いがありました。

2. 報告事項

(1) 本部報告

①フェロウシップ委員会（2/8）（谷村）

・明日明後日とフレッシュマンセミナーが金沢で開催される。支部から3名が参加する。

②本部財務委員会（1/24 2/15）（鈴木利）

・会員減少によって予算も縮小する。削減する場所を議論した。

(2) 支部報告

①東海住宅建築賞委員会（2/7）（吉元）

・住宅賞の趣旨・委員会メンバーの報告。

3. その他

① 退会届 正会員「坂田孝之（愛知）」（久保田）

ジュニア会員「宮田奈智子（愛知）」（久保田）

② 転入 正会員「富田彰次（愛知）」（久保田）

③ リフレッシュセミナー（3/11-13）参加者について

・愛知地域会の中渡瀬拓司さん・黒野有一郎さん・西村和哉さんの3名が参加予定。

④ JIA 近未来研究特別委員会の委員選任について

・愛知地域会の高木耕一さんにお願ひする。

⑤ 2018年度東海支部・各地域会の総会日程について

・岐阜地域会総会4月17日

・三重地域会総会4月25日

・静岡地域会総会4月23日

・愛知地域会総会5月11日

・支部総会5月11日

⑥ 2018年度 東海支部通常総会議案書について

議 事

1. 審議事項

①事業報告 第5回 東海住宅建築賞2017（吉元）承認された。

2. 協議事項

①JIA 保存再生会議新年度委員の推薦について

・愛知地域会保存研究会の原眞佐美さんに確認する。

3. 報 告

①退会届が提出されない会員の対応（見寺）

・会費が2年間未納の事を確認の上、理事会へ報告する。



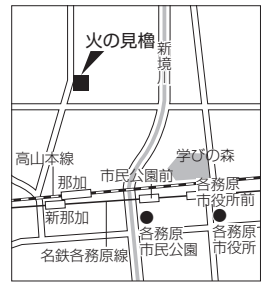
のどかな集落に円錐型の屋根



全景



石積みで囲われた脚部



■紹介者コメント

前野町火の見櫓は、昭和12(1937)年に建てられました。高さ約19m、L75×75×6の山形鋼を四脚に建て、L60×60×4の横材を渡し、11節のリング式ターンバックルで固めた、非常にスリムで美しいプロポーションの鉄塔です。火の見櫓の望楼屋根の形状は円錐、三角錐、四角錐の3タイプがあるそうですが、ここでは円錐形屋根付の方形望楼が採用されており、この屋根が高く屹立する櫓に、とても柔らかい印象を与えています。また、中間に半鐘が設けられており、ここにも同じ円錐形の小屋根が架けられています。

4m前後の狭い路地で構成される集落に建つ

火の見櫓は、遠目からでもその特徴的な姿を眺めることができ、その柔らかいシルエットは鉄造ながら、木造家屋が密集する集落の景観にとっても馴染んでいます。

敷地は地区の集会場(ふれあいセンター前野)内の一角で、隣接して各務原市消防団第四班前野班の消防倉庫が建っています。各務原市教育委員会によると、すでに火の見櫓としての本来の役割は終え、地域の歴史的景観の核として広く市民に親しまれているとのこと、現地を訪れると、石積みで囲われた脚部周りは緑が植えられ、前野町自治体によって良く管理されていることが伺えます。また、年始には足元に松飾りを施し、

注連縄を締めるそうで、この火の見櫓が地域のシンボルとして、いかに住民の暮らしに深く根付いているかがわかります。往時は地域防災の拠点として活躍した火の見櫓が、今後も地域防災のシンボルとして、末永く地域に愛され続けることを期待します。

所在地: 岐阜県各務原市那珂前野町4-2
所有者: 前野町自治会
建設年: 昭和12(1937)年
構造・規模: 鉄骨造 高さ19m
施工: 熊田商店鉄工部
文化財指定等: 登録番号第21-0102号

中澤賢一 (JIA 愛知) | 堀内建築研究所



データ発掘 (お気に入りの歴史的環境調査)

有松 服部良也家住宅



旧東海道に面した外観 : 表土蔵と主屋



十帖二間続きの表座敷



上 | 和(右)洋(左)折衷の隠居棟
下 | 炬のある客間



■発掘者コメント

有松の町並みは平成29(2017)年「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されたが、当家はそのほぼ中央、有松鳴海校会館の前に位置する。

旧東海道を挟み、かつて絞商服部一族が集まる特別な場所でもあった。【屋号「大井桁」(現・棚橋家)、「井桁屋」、「井桁一」(良也家)、「井桁十」、「井桁屋離れ」(現・後藤家)】

良也家は井桁屋第6代孫兵衛の弟幸平が明治38(1905)年に分家した際、表土蔵を受継ぎ、2,450㎡におよぶ広大な屋敷の3方を石積みとして造成し、主屋を始め納屋、新座敷・茶室、隠居棟、裏土蔵等を昭和初期にかけて次々に建て、趣のある庭とともに整備した。建物は延べ約800㎡におよぶ

だ。これを可能にしたのは、井桁一が明治期に開発された大量生産の新技法「嵐絞」などを企画・販売し(絞りや染は外注)、交通網の発達もあり、全国に販路を広げ繁栄したからである。

主屋は東側を土間とする2列6室の構成、高窓のある「釜屋」と呼ばれる高い吹き抜け土間があり、大きな井戸や流し、かまどがあり、かつては多くの人が炊事や作業で忙しく働いていたことを物語る。西側は庭に面し炬のある客室や勝手、北側には新座敷棟、茶室(表千家宗匠監修)があった。隠居棟は和洋折衷で、2階の洋間は初代幸平の先進性と風雅な人となりを反映した室で、ステンドグラスの窓を持つ陽当たりの良い部屋となっている。藍染川沿いの裏土蔵の1階には遊び部屋があり、かつては

アノを備え、タップダンスを楽しんだとのこと、客人たちとの熱き交流が垣間見える。地階には著名な絞作家・早川嘉英氏の「蔵工房」が今もある。良也家はいつかまた新しい交流を生む場に蘇ることでしょ。

所在地: 名古屋市緑区有松2345 アクセス: 名鉄本線有松駅より徒歩6分 建築年: 主屋 明治28(1895)年 棟 梁: 入山彦次郎他大工3名 構造規模: 木造ツツ2階建て、切妻・棧瓦葺き 建物面積: 主屋約340㎡ 敷地面積: 2,456㎡ 文化財指定: 県指定文化財/市都市景観重要建築物(表土蔵) / 町並み保存地区伝統的建造物参考資料: ①「有松」伝統的建造物群保存対策調査報告書[名古屋市、平成29年] ②「愛知県有松町の民家」[名古屋工業大学城戸久(住宅研究7) 昭和30(1955)年]

三井富雄 (JIA 愛知) | モモアーキテツネットワーク



第22回中部インテリアデザイン連絡会+JIA愛知建築家セミナー 東利恵氏講演会「リゾートの空間」

CPD 2 単位予定

日時:2018年4月27日(金) 18:30~20:00(受付18:00)

場所:東邦ガス・栄ガスビル5階 キングルーム
(名古屋市中区栄3-15-33)

参加費:一般1,000円 学生500円(懇親会参加費5,000円予定)

申込先:参加者・同伴者氏名、連絡先、所属団体、懇親会参加の有無を記入の上、下記までFAXにてお申し込み下さい。

日本インテリアデザイナー協会中日本エリア(担当・木辺)

FAX 052-709-5377

主催:中部インテリアデザイン連絡会

日本建築家協会東海支部愛知地域会

世界劇場会議名古屋フォーラム2018

発信する劇場~音楽あふれるまち・豊中の挑戦

CPD4 単位予定

日時:2018年6月1日(金) 14:30~(開場14:00)

場所:愛知県産業労働センター「ウインクあいち」大会議室902
(定員:150名)

スケジュール

○14:30~

開会・趣旨説明(松本茂章・静岡文化芸術大学教授)

第1部「自治体文化政策の醍醐味~豊中ならではの文化芸術の振興に向けて」

講師:豊中市副市長 田中逸郎(対談:松本茂章)

同市都市活力部文化芸術課長 長坂由貴

第2部「劇場設計の妙味~豊中市立文化芸術センターを事例に」

講師:日建設計 フェロー役員デザインフェロー 江副敏史

第3部「劇場運営の魅力~地域とともに歩む楽団として」

講師:センチュリー交響楽団 楽団長 | 望月正樹

※上記の講師などはやむを得ない事情で変更になる場合がございます。

○18:30~20:00

交流会

(会場:愛知県産業労働センター「ウインク愛知」中会議室B903)

参加費:フォーラム 一般2,500円(ITCN会員2,000円)

学生1,500円(ITCN会員1,000円)

交流会 4,000円(一般・学生・ITCN会員とも)

問い合わせ:NPO法人世界劇場会議名古屋(ICTN)世界劇場会議名古屋フォーラム2018実行委員会

〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-14-12 グランビル2B

TEL & FAX 052-232-2270 Email itcn@itc-nagoya.com

主催:NPO法人世界劇場会議名古屋

(「世界劇場会議名古屋フォーラム2018」実行委員会)

後援(予定):日本建築家協会東海支部 他

地域会だより

<東海支部>

5/11 支部通常総会

6/19 本部通常総会

<静岡>

3/24 まち歩きウォッチング

3/28 3月静岡地域会定例役員会

4/13 4月静岡地域会定例役員会

4/23 静岡地域会通常総会

4/23 講演会 山辺豊彦氏

「地域材を活用した中大規模木造建築物の設計」

<愛知>

3/2 住宅研究会 連続環境セミナー 2018

「図解で解決空き家のパターン別スッキリ解決法」講師:中山聡

3/3 地方公共団体におけるコンペのあり方を考えるシンポジウム

3/9 JIA愛知役員会&法人協力会CPD研修

3/10 住宅研究会 連続環境セミナー 2018

「環境ノイズエレメントを読む」講師:宮本佳明

3/14 JIA愛知法人協力会役員会

3/30 JIA愛知役員会

4/13 JIA愛知役員会

4/27 東利恵講演会

5/26~5/28 住宅研究会 ベトナム旅行

<岐阜>

3/2 JIAの窓

住宅見学会「一つ屋根の家」(後藤様邸)

3/3 第17回ぎふ建築・生活・芸術系学生・生徒優秀作品展 合同講評会

主催:日本建築学会東海支部岐阜支所

4/5 JIA岐阜役員会

<三重>

2/2 臨時役員会

2/9 第7回例会、会員研修会5(建材研修会を予定)

弔りこころ、大切な葬儀

葬儀のこと、お応えします。

一柳の葬儀は、各種・価格を段階的に用意いたし、ご希望される予算に合わせてお見積りいたします。宗教・宗派、葬儀規模の大小にかかわらず、全ての葬儀に丁寧にお応えしています。

いちやなぎ斎場は、365日・24時間、いつでも病院・施設等から直接入れます。

いちやなぎ中央斎場

名古屋市千種区千種二丁目19番1号
TEL (052) 745-1212

いちやなぎ野並斎場

名古屋市天白区野並三丁目538番1号
TEL (052) 899-0111

◆葬儀のお申し込み◆お問い合わせ◆事前相談は

TEL.052-251-9296

365日・24時間 一柳のスタッフが対応いたします!

日本建築家協会東海支部 特約店



株式
会社

一柳葬具總本店

<http://www.ichiyalagi-sogou.co.jp>

イチヤナギ倶楽部

- 入会金1万円のみで掛金不要、基本価格の2割引と交通事故傷害保険の特典取得
- 相続、遺言、後見制度など相談先の紹介が受けられます



編集後記

●2018年1月号「東海支部設立30周年特集」24ページの企画編集では、本誌の足跡変遷や現在の会員アンケートなど、私にとってあらためて本誌を見直し価値を再認識する良い機会となりました。そして今月4月号、総会の時期も迫ってまいりました。各委員会の活動は活発ですが会員の入会資格・会員数減少・高齢化、そしてJIA MAGAZINE (347号) 横文彦先生の記事、低い設計料・BIM・AIなど「設計をとりまく大きな環境の変化」はJIA会員が共有すべき喫緊の問題であると感じました。押し寄せる時代の変化や難題をどのように乗り切るか考え行動しなければなりません。タイトな本誌ですが今月から表紙や「東海とっておきガイド」をマイナーチェンジしての発刊となりました。Web化の話も出しましたが、従来通り紙媒体にこだわった機関紙としての意義評価を大切にして支部会員

の皆さまに引き続き有意義な情報発信ができるよう努力したいと思います。(伊藤彰彦)
●原眞佐実氏の「名古屋城木造復元について」を興味深く拝読した。名古屋城天守(本丸)の木造復元が賛否両論の渦中にある今、経済と文化の関係を再考する機会を本論考によりいただいた。資本主義の日本において、物事の価値はお金や、その負荷を被る人々の意見に左右されることが多い。先日、ミラノでアンジェロ・マンジャロッチの「ガラスの教会」に訪れる機会を得た。ちょうど、ミサの最中で、集まった人々が誇らしげな笑顔で、改修にお金がかかって大変だと話していたのが印象的だった。印象的というより、文化の違いを強く感じた。「ガラスの教会」が彼ら一人一人の日常に溶け込み、日本の公共建築とは明らかに異なる公共性を持っていると感じたからである。生活に密着した教会だから、名古屋城と同列では比較できないが、自分たちのまちの建築を愛し、誇りに感じている人々を羨ましく思った。さまざまな文化を経済という

尺度だけで語らない日本の姿を是とするのは、青臭い理想だろうか。(宇野 享)

ARCHITECT

第355号

発行日 2018.4.1 (毎月1回発行)

定価 380円(税込み)

発行責任者 車戸慎夫

編集責任者 中澤賢一

編集 東海支部会報委員会

愛知地域会ブリテン委員会

建築ジャーナル内

ARCHITECT 編集部

名古屋市東区泉 1-1-31 吉泉ビル 703

TEL (052) 971-7479 FAX 951-3130

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

<http://www.jia-tokai.org/>

【お詫びと訂正】

『ARCHITECT』3月号 p10に写真掲載の誤りがありました。一般部門・入賞で紹介した「こじまこども園」と「松阪市子ども発達総合支援センターそだちの丘」の写真が入れ替わっておりました。関係者、読者の皆さまに謹んでお詫び申し上げます、ここに訂正いたします。